

タイトル	発表者	要旨
水田に生息するカエル類減少メカニズムの解明	青木香澄・丑丸敦史（神戸大・人間発達環境）	農業生態系では土地利用形態の変化に起因する生物多様性の低下が引き起こされている。兵庫県南東部においても都市化に伴うカエル類個体数の著しい減少が報告された。また水田の圃場整備化や放棄が進行しており、カエル類の減少が危惧されている。本研究では、トノサマガエルを対象に土地利用形態の変化に伴う個体数の減少とその要因を明らかにすることを目的とした。
福井県中池見湿地における珪藻群集と水環境との関係	石角江里佳（京都造形芸術大学）、○大塚泰介（琵琶湖博物館）、打越崇子（琵琶湖博物館）、木原靖郎（たんさいぼうの会）	福井県敦賀市の東部に位置する中池見湿地は分厚い泥炭層を擁する低層湿原である。中池見湿地の珪藻植生を調べるとともに、水環境と珪藻群落との対応関係を明らかにした。2013年5月の調査で52属326種（変種として扱われているもの含む）の珪藻の生息を確認することができた。一般に汽水産および海産とされる珪藻も出現した。正準対応分析（CCA）の結果、湿原内の珪藻の分布は、主に水流の有無と硝酸・亜硝酸濃度の影響を受けていたことが示唆された。
淀川のヌートリアによるイシガイ科貝類の捕食事例、および死殻から推定されるその特徴	○石田 惣（大阪市立自然史博物館）、木邑聡美（いであ株式会社大阪支社）、唐澤恒夫・岡崎一成・星野利浩・長安菜穂子（イシガイ研究会）	2012年9月～2013年8月に淀川の八雲ワンドでイシガイ類の生貝及び合弁死殻を採集したところ、イシガイとトンガリササノハガイの死殻の約70～90%にヌートリアの捕食痕と推定しうる傷があった。両種の死亡要因の多くをヌートリアの捕食が占めている可能性は否定できない。傷有り死殻の殻長平均は生貝よりも大きく、ヌートリアは大型個体を好む傾向があるようだ。映像や傷の位置の解析から、捕食行動についてもいくつかの考察を行う。
和泉葛城山ブナ林の衰退と土壌化学性の劣化	○伊藤和男・慈幸真志・竹内康晃・岡田和也（大阪府立大学高専 環境物質化学コース）	国指定の天然記念物であるブナ林が、大阪府と和歌山県の境に位置する和泉葛城山山頂付近に分布している。しかし近年その衰退傾向が指摘されている。本研究では、ブナ林の衰退と土壌酸性化の関係を調べるため、ブナの衰退度調査とブナ木周辺の土壌調査を行った。その結果、衰退が進んだブナ周辺の土壌は酸性化が進んでいることが明らかとなった。同地域のブナの衰退には酸性雨による土壌酸性化が要因の一つである可能性が示唆された。
大阪府泉南地域で分布拡大している国内外来種アオモジの初期成長特性	○上森真広・幸田良介（（地独）大阪府立環境農林水産総合研究所）、奥田史郎（（独法）森林総合研究所関西支所）	国内外来種であるアオモジの初期成長特性を調査した。伐採処理により攪乱地を形成したところ、アオモジをはじめとした多数の先駆種が発生した。アオモジの実生の個体数は、代表的な先駆種のアカメガシワよりも少なかった。しかし、アオモジの成長量は大きく、死亡率も低いため、稚樹（樹高30cm以上）の個体数は、アオモジの方がアカメガシワより多くなった。今後、アオモジが遷移初期段階の主要な構成種になると考えられ
深日漁港湿地の底生生物	大阪湾海岸生物研究会（代表：山西良平）	大阪府泉南郡岬町の深日漁港の北端に、約3000平方メートルの塩性湿地が残されている。2014年春にこの湿地の底生生物調査を実施した。その結果、91種の海藻と底生動物が記録された。中には大阪府レッドリスト2014掲載生物が7種、さらに府下ではここが唯一の生息地であると考えられる腹足類3種も記録された。ここは万葉集にも登場する「吹飯の浦」の名残をとどめた貴重なスポットである。
大阪市中に残る湿地保全のための取り組み	大島新一郎・笹井敏博・○富澤裕美子・磯上慶子	大都会大阪の市中、湧水で涵養された湿地が確認された。場所は上町台地南部西斜面端。古来より伝承などに語られる片葉の葦もみられる葦群落を中心に、準絶滅危惧指定であるコガマを含む3種のガマ類などの湿地性植物、トンボ類を中心とした昆虫、四季を通じての野鳥の飛来など、この湿地は小さいながらも生物多様性を保持した貴重な環境となっている。しかし現在は国の売却予定地であり、いかに保全していくかが今後の課題である。
淀川流域における外来魚類の分布状況	○川瀬成吾・石橋 亮・内藤 馨・山本義彦（（地独）大阪府立環境農林水産総合研究所水生生物センター）、鶴田哲也（大阪産業大学人間環境学部生活環境学科）、田中和大・木村亮太・小西雅樹（近畿大学農学部環境管理学科）、上原一彦（（地独）大阪府立環境農林水産総合研究所水生生物センター）	淀川流域における外来魚類の分布状況を明らかにするために、2008年から2014年にかけて、タモ網、投網を用いて129地点、地引網で94地点の計223地点で採集調査を行なった。その結果、12種の国外外来魚と2種の国内外来魚が採集され、各魚種の分布状況が明らかとなった。本調査によって当流域でこれまで見つかっていなかったアリゲーターガーやカラドジョウが記録された。
大阪府におけるアライグマ、ヌートリア、ハクビシンの分布拡大状況	幸田良介（（地独）大阪府立環境農林水産総合研究所）	農家へのアンケート調査から外来哺乳類3種の分布拡大状況を調査した。大阪府ではアライグマの分布や農業被害が最も顕著であり、さらなる分布拡大がみられることから被害増加が懸念された。ヌートリアの分布は北部地域が中心で、捕獲の効果がみられる地域がある一方で、淀川流域では個体数や被害の増加が示唆された。ハクビシンの分布はまだ限定的であるものの、分布や農業被害が拡大傾向にあることが明らかになった

カシノナガキクイムシ捕獲トラップを用いた防除の事例紹介	○小林徹哉（大阪府立環境農林水産総合研究所）、安田 晃（大阪府立環境農林水産総合研究所農業大学校）、幸田良介（大阪府立環境農林水産総合研究所）	ナラ枯れ防除の取り組みのひとつとして、ペットボトルトラップによるカシノナガキクイムシの捕獲がある。平成25年6月に、茨木市下音羽地内の森林に3タイプのペットボトルトラップを設置して捕獲を行い、その捕獲数を算出した。今回、その方法と結果について事例紹介を行う。
大阪府南部の都市公園における樹液食昆虫群集の多様性	○斎藤裕介・平井規央・石井 実（大阪府立大院・生命・昆虫）	都市公園の樹液に集まる昆虫群集の多様性を明らかにするために、南大阪地域の都市化の程度の異なる地域に位置する3ヶ所の公園において野外調査を実施した。その結果、都市公園の樹液食昆虫群集は、種群では特にコウチュウ目とハチ目が優占し、その多様性は公園周囲の都市化の影響を受け、低下することが明らかになった
京都府菌類レッドデータブック2015の残された課題	佐久間大輔（大阪市立自然史博物館）	12年ぶりに改定された京都府レッドデータブック。未記載種、実態不明の種など分類学的研究が不十分な菌類ならではの課題も多いが、標本資料や知見の継続が十分でないことも大きな課題となった。京都府域をカバーする生物多様性情報拠点の整備が望まれる。今回の改定の基礎情報には関西菌類談話会をはじめとするアマチュアの研究活動の成果を盛り込んだ。次回改定に向けて硬質菌・子囊菌などの情報を充実させる必要がある
堺市南部の稲作水系における水生昆虫相とレッド種	○鈴木真裕・平井規央・石井 実（大阪府立大院・生命・昆虫）	2010～2014年の間に堺市南部のため池や水田における水生昆虫とトンボ目成虫の観察を行い、71種以上の水生昆虫と35種のトンボ目成虫を確認した。そのうち環境省または大阪府のRDB掲載種は、水生昆虫でオオミズスマシなど13種、トンボ目成虫でネアカヨシヤンマなど9種が確認され、多くの絶滅危惧種の生息が確認された。
奈良県でコガネグモは減少しているのか？	関根幹夫	コガネグモは、12都府県でレッドリストに掲載されているが、定量的データはほとんど示されておらず個体群密度の測定法も確立していない。2013 -2014年に行った奈良県下全市町村にわたる生息分布調査と個体群密度の測定結果に基づき、奈良県におけるコガネグモの生息状況について検討を行った。
タンポポ調査西日本2015年調査について	タンポポ調査・西日本実行委員会（事務局：木村進）	タンポポ調査西日本実行委員会では、2010年調査に引き続き、西日本19府県でタンポポ調査を実施している。タンポポを見つけたら、頭花を採取し必要事項を記入した調査用紙とともに送っていただき、在来種・外来種のタンポポ、両種間の雑種タンポポの分布状況を明らかにしようとするものである。すでに2014年春に調査を実施し、約23000点のデータを得ており、これらの結果の中間報告をするとともに、今春の調査に向けてご協力をお願いしたい。
和歌山県千里浜におけるアカウミガメの遺伝的多様性と複数父性	○鶴田祐士（大阪府立大院・生命・昆虫）、松沢慶将（須磨海浜水族園・日本ウミガメ協議会）、平井規央・石井 実（大阪府立大院・生命・昆虫）	和歌山県千里浜で産卵を行ったアカウミガメ <i>Caretta caretta</i> の雌成体とその子について、マイクロサテライトマーカーによるDNAを解析をおこなったところ、日本の産卵地で初めて複数父性の産卵巣が発見され、単父性の産卵巣に比べ遺伝的多様性が高い事が明らかになった。
葉緑体DNAに基づいた在来二倍体タンポポの地理的遺伝構造と頭花形態の関係	○特努恩・横山亮介・三好浩平・渡中実里・濱田稔史・谷山健太・名波哲・伊東 明（大阪市立大学理学研究科）	日本には二倍体由来タンポポが多く生育している。タンポポ属の分類は難しく、頭花形態での種同定は困難とされる。そこで、葉緑体DNAを用いて在来二倍体タンポポの地理的遺伝構造を調べ、頭花（総包）形態との関係を解析した。40種類の葉緑体ハプロタイプが見つかり、西日本、東日本のそれぞれに分布するものと両方に分布するものに分けられた。総包形態は4グループに分けられたが、ハプロタイプとの関係は明瞭でなかった。
南三陸勝手に生物調査隊	西澤真樹子（NPO法人大阪自然史センター）、高田みちよ（芥川緑地資料館あくあびあ芥川）、平田慎一郎（きしわだ自然資料館）、田中良尚（伊丹市昆虫館）、河合正人（大阪市立自然史博物館）、松浦宜弘・大崩貴之（京都大学）、渡部哲也（西宮市貝類館）、鈴木卓也（南三陸ネイチャーセンター友の会）、山田虹太郎（南三陸町観光協会）	『南三陸勝手に生物相調査隊』は、被災した志津川ネイチャーセンターを支援する有志の活動で、標本採集と調査によって町の自然情報の豊かさに貢献し、復興を支援するのが目的です。各自の専門分野にあわせた調査をこれまで10回行い、400点以上の標本を採集・作成しました。調査結果を反映させた体験プログラムの企画や、自分たちの所属館での展示を通して震災と自然系社会教育施設の状況についての普及啓発活動も進めています。
近畿地方におけるウキゴリとスミウキゴリの遺伝的集団構造	原 仁志・平井規央・石井 実（大阪府立大院・生命・昆虫）	ウキゴリ <i>Gymnogobius urotaenia</i> とスミウキゴリ <i>G. petschiliensis</i> （ハゼ科）は両側回遊性であるといわれているが、生活史に関する知見が少ないため、近畿地方において分布調査と遺伝子解析を行った。近畿地方において、ウキゴリは陸封の割合が高い可能性が示唆された。

世界遺産春日山原始林におけるアカガシ <i>Quercus acuta</i> の分布構造	○前迫ゆり（大阪産業大学大学院・人間環境学研究科）、能瀬駿一・山田佳果（大阪産業大学人間環境学部生活環境学科）	世界文化遺産春日山原始林は、奈良市東部に位置する。およそ300haの照葉樹林が成立し、特別天然記念物にも指定されている。照葉樹林の骨格を形成するブナ科常緑広葉樹は6種生育するが、胸高直径80cm以上の個体は362本確認されている（奈良県2011、2012）。その比率はウラジロガシが最も高く、ついでツクバネガシ、アカガシ <i>Quercus acuta</i> Thumb.（72個体）、イチイガシ、コジイ、アラカシの順である。シカの採食による影響が著しく、ブナ科樹木の更新が危惧されていることから、本研究では、高標高域に生育するアカガシを対象に分布調査を行い、GIS図を作成した。個体群構造について検討した結果、1.3m以上の個体は300本以上確認できたが、1.3m以下の稚樹は数本程度しか生育せず、実生も少ないことから、きわめて不安定な個体群構造であると考えられた。
カワムツの分布と遺伝的多様性	○松岡 悠・平井規央・石井 実（大阪府立大院・生命・昆虫）	カワムツ <i>Candidia temminckii</i> （コイ科）は国内では静岡県以西に分布するが、人為的導入により分布を拡大しており、東日本では国内外来種とされている。本種の遺伝子解析を行った結果、3系統が確認され、東海地方の1系統は他の2系統と大きく分化していた。
南三陸おらほの酒プロジェクト	一般社団法人 南三陸町復興推進ネットワーク、南三陸ネイチャーセンタ－友の会、NPO法人海の自然史研究所	南三陸町は一次産物に恵まれ、自給自足も可能な場所である。根源的に安心できる環境であり、都会から移住する人も多い。しかしその生活だけでは、楽しみ、潤い、繋がりがなく殺伐となる。人の社会への関わりを育むツールとして「酒」は重要と考え、酒米を町内で作ることで、これを交流事業として都市と地域を結びつけることで、地域に潤いと勢いを齎す。加えて、耕作放棄地活用および復興開発で消失する自然の保全にも貢献する。
奈良公園におけるニホンジカと鳥類の関係	山田実央・○和田恵次（奈良女子大学）	奈良公園のニホンジカと関係をもつ鳥類の行動内容とその季節変化・日周変化を調べた。ニホンジカと関係をもつ鳥類は6種みられ、その行動内容には、シカがヒトからもらう餌の横取りやシカの体表のつつき、毛のむしり取りなどがあり、いずれも春から夏にかけて多く観察され、1日内で多く観察される時間帯は、行動内容によって午前、午後、夕方と異なっていた。
里環境の会OPU大阪府立大学中百舌鳥キャンパスにおけるチョウ類群集の多様性	山本捺由他・新田 亘（大阪府立大学・生命環境科学域・緑地環境科学類）	里環境の会OPUは、大阪府立大学の学生主体の組織で「人と自然との関わりについて、自分なりの考えをもち、自分の言葉でそれを表現できるようになること」を目標とし、野外散策や勉強会などの活動を行っている。大阪府立大学中百舌鳥キャンパスにおいて環境指標性の高いチョウのルートセンサス調査を3年間行った。調査結果から多様性指数を用いて群集構造を解析し、キャンパスの環境評価を行った。
企業と連携した絶滅危惧種保護の取り組み	山本義彦・上原一彦（（地独）大阪府立環境農林水産総合研究所）	■未■
武庫川水系に生息する野生メダカの遺伝子型分布及びヒメダカ遺伝子の移入実態	横田弘文・桑原なつき・中野瑛子・江口さやか	武庫川水系に生息する野生メダカの遺伝子型分布及びヒメダカ遺伝子の移入を調査した。その結果、上流域のメダカは遺伝子型B39の単一集団であったが、下流域のメダカはB1a、B9及びB22の3つの遺伝子型で構成されていた。従って、上流域と下流域のメダカは遺伝子型が異なるため、相互に放流の対象にはならないことが明らかとなった。また、下流域の個体からはヒメダカ遺伝子が検出され、ヒメダカとの交雑が示唆された。
大阪府北部鴻臈山におけるギフチョウ個体群の保全ー幼虫の放飼実験と翌春の発生状況ー	吉村忠浩・竹内 剛・平井規央・石井 実（大阪府立大院・生命・昆虫）	ギフチョウの生息密度が低下している大阪府北部の鴻臈山において、2013年から幼虫の放飼実験を開始し、2014年に卵塊の調査によりその効果の検証を行った。2014年の卵塊調査の結果、前年よりも卵の密度が増加したことから放飼した幼虫の一部が成虫として羽化し、繁殖を行ったと考えられた。卵塊の一部を飼育したところ、孵化率は約70%と比較的高かったのに対して、2014年に飼育系統から得られた卵の孵化率は約20%と低い孵化率だった。
紀ノ川水系の上流域における紀伊半島大水害の瀬の底生動物群集への影響	○与世田信忠・谷田一三・平井規央・石井 実（大阪府大）	2011年の秋に中国・四国地方を縦断した台風12号は、紀伊半島に甚大な被害をもたらしたために「紀伊半島大水害」と命名された。この大水害の影響により、紀ノ川水系の上流部でも土砂崩壊が起き、河川の底生動物群集にも甚大な被害をもたらされた。
関西周辺の移入種ハッカチョウの生息状況	○和田 岳（大阪市立自然史博物館）、大阪鳥類研究グループ、都市の自然調査プロジェクトProject U	2014年4～7月に大阪府を中心にハッカチョウの分布調査を実施した。ハッカチョウは、中国南部からインドシナ半島原産のムクドリ科鳥類で、沖縄県以外の日本では移入種と考えられる。以前から西日本では、兵庫県や香川県に定着していたが、大阪府でも2005年以降定着が確認されている。近年、大阪府内で分布拡大傾向にあり、現状把握のため調査を行った。その結果、府内に少数ではあるが、広く定着していることがうかがえる。